

保護者の養育態度が幼児の問題行動に与える影響

油川さゆり (玉川大学)

キーワード：養育態度，幼児，問題行動

問題と目的

近年，子どもの暴力行為の低年齢化が問題となっているが，先行研究より，親の養育態度が子どもの攻撃性に影響を与えることが明らかになっている（中道・中澤，2013 ほか）。問題行動は，攻撃性，反社会性など，年齢に見合った行動をコントロールできず周囲に迷惑をかけるタイプの外在化した問題行動と，不安や抑うつ等，自己に問題を生じさせる内在化した問題行動に大別されるが，養育態度が，内在化した問題行動にどのような影響を与えるのか，未だ明らかではない。そこで，本研究では，年中・年長児の保護者に質問紙調査を行い，親の養育態度が幼児の問題行動及び，外在化した問題行動，内在化した問題行動に与える影響について明らかにする。

なお，先行研究では，問題行動に影響を与えることが予測される交絡因子はほとんど考慮されて来なかったが，本研究では性別，所属（年中・年長），SES（家庭の経済状況，保護者の最終学歴）を統制した上で分析を行う。

方 法

対象 9 都道府県の保育園，認定こども園の年中・年長児 624 人の保護者。子育てに最も関わっている人に回答を依頼した。

調査内容 平成 27 年 10 月に無記名式質問紙調査を行った。調査内容は，親の養育態度調査（中道・中澤，2003），幼児の自己制御機能尺度（大内・長尾・櫻井，2008），問題行動・向社会性を測定する Strengths and Difficulties Questionnaire (Goodman, 1997)（以下，SDQ）の他，家庭の経済状況，最終学歴についても回答を求めた。

SDQ は，「行為」「多動」「情緒」「仲間関係」「向社会性」の 5 つの下位尺度で構成される。が，「向社会性」を除く 4 つの下位尺度の得点の合計が，問題行動得点として用いられる。

「行為」「多動」の合計で外在化した問題行動得点が，「情緒」「仲間関係」の合計で内在化した問題行動得点が表される。問題行動得点は，得点が高いほど不適応である。親の養育態度は，愛情ある言語・身体的表現を用いて子どもの意図・欲求を充足させようとする「応答性」と子どもの意志に関わらず親が子ども

にとってよいと思う行動を決定し強制する「統制」の 2 つの下位尺度から成るが，その高低から，権威的（175 名），権威主義的（128 名），許容的（146 名），放任的（175 名）の 4 つのスタイルに分け，差を検討する（Table 1）。先行研究より，権威的態度が最も適応的であると考えられている。

Table 1 養育態度の分類

	統制	応答性
権威的態度	高	高
権威主義的態度	高	低
許容的態度	低	高
放任的態度	低	低

結果と考察

分析には，性別，所属（年中・年長），SES（家庭の経済状況，保護者の最終学歴）を統制した，標準化されていない残差得点を用いた。保護者の養育スタイルによる，子どもの問題行動，外在化した問題行動，内在化した問題行動の差を一元配置分散分析で検討したところ，問題行動と外在化した問題行動に主効果が見られ（ $p < .05$ ），内在化した問題行動には有意傾向の差が見られる（ $p < .10$ ）に留まった。

多重比較の結果，問題行動と外在化した問題行動については，権威的態度の保護者を持つ子どもは，権威主義的，放任的態度の保護者の子どもよりも問題行動得点が有意に低かった（ $p < .05$ ）。また，内在化した問題行動については，権威的態度の保護者を持つ子どもは，放任的態度の保護者の子どもよりも得点が有意に低かった。

性別，所属，SES といった交絡因子を統制した上でも，権威的態度の保護者の子どもが問題行動の面において適応的であることが示されたが，その影響は内在化した問題行動よりも外在化した問題行動において顕著であることが明らかになった。